

気仙沼地域における高次脳機能障害者の支援ネットワーク構築

村上 友香 三東 梨沙
気仙沼市立病院

【はじめに】

平成18年に高次脳機能障害支援普及事業が宮城県で開始されてから6年が経つ。県内でも気仙沼は体制整備の遅れた地域であり、高次脳機能障害に対する支援は、ほとんど行われていない状況であった。平成19年からの5年間、高次脳機能障害をもつ当事者・家族との関わりを通して、支援ネットワークの必要性を痛感した。「高次脳機能障害をもつ方でも、この地域で安心して生活できること」を目標に当事者・家族とともに支援ネットワーク構築に向けて取り組んできた。5年間の経過と今後の課題を以下に報告する。発表については本人・家族の同意を得ている。

【症例紹介】

20歳代男性、診断名：びまん性軸索損傷、平成19年9月にバイク事故にて受傷、当時高校3年生であった。軽度左片麻痺と高次脳機能障害（記憶障害・注意障害・遂行機能障害）を呈していた。

【経過】

OTは受傷後3週間目より介入し当院にて入院リハビリを3ヶ月実施し自宅退院となった。その後、高次脳機能障害の精査目的にてA大学病院に2ヶ月入院し、退院後当院にて外来リハビリを継続。当事者・家族の希望である高校卒業と、就労を目標にOT・STを実施した。高校は通信制の高校に転校し卒業することができた。生活リズムの獲得と外出の機会を作るため身体障害者療護施設への通所も開始した。しかし、具体的な就労に対する支援はどこに行けば受けられるのか、どのような職業につけるのかなど医療者側ですら分からない状況であった。

【関連機関との関わり・地域活動の動向】

○平成20年～

- 1) A大学病院と評価結果・訓練経過の情報交換
- 2) 転校先の高校教員へ情報提供
- 3) 通所施設との情報交換
- 4) 保健福祉事務所と市役所の保健師に情報提供（合同で家庭訪問を実施）
- 5) 高次脳機能障害者支援関係者会議に参加
地域の保健師、病院関係者、ハローワーク（障害担当雇用指導官）宮城県リハビリテーション

支援センター医師など14人が参加

○平成21年～

- 6) NPO法人Bに通所を開始 就労体験を実施
- 7) 高次脳機能障害者支援研修会に参加
当院での事例を報告した（90人以上の参加）
- 8) 気仙沼市で初の当事者・家族交流会が開催

○平成23年～

- 9) 宮城県高次脳機能障害者支援コーディネーターによる院内研修会（関連機関の参加あり）
- 10) NPO法人ほっぷの森が当事者・家族交流会の運営に協力 開催回数も1/月に増加
- 11) 高次脳機能障害者支援関係者会議に参加
生活支援センター・就労支援センター、地元NPO法人も参加

【考察】

高次脳機能障害者に対する支援ネットワークは地域ごとに体制整備される事が望ましいと言われている。しかし、当地域では具体的なネットワークがなく、院内での支援だけでは不十分な状態であった。今回、関連機関との関わりや保健福祉事務所の協力により支援ネットワークの枠組み作りを行うことができた。狭い地域のメリットである顔の見えるつながりができ、情報交換を安心して行える環境になってきている。しかし、今回の当事者も含め、実際就労につながったケースは少なく今後の課題も多い。気仙沼地域の課題と展望を以下に挙げる。

- 1) 地域で情報を共有するための連携パスの作成
- 2) 高次脳機能障害支援拠点病院・支援コーディネーターを各地域に配置
- 3) ピアカウンセラー・ジョブコーチの協力
- 4) 症例検討会の開催（具体的支援内容の検討）
- 5) 就労に向けて活動できる事業所の設置、事業所内でのアセスメントの必要性
- 6) 就職先の獲得、事業主への啓蒙活動
地域格差を無くすことは容易なことではない。しかし、当地域だからこそできる事もあると思われる。まずは、地域の現状を広く発信していきたいと考える。